

令和4年度 (光明支援) 学校の研究概要 ～令和5年1月末現在～

運営委員氏名 (後藤 麻里絵)

研究テーマ	児童生徒が、分かる実感，できる喜びを味わえる授業づくりを求めて ー学び合い，高め合う場面を通してー																																										
研究目標	授業実践を通して見えてきた児童生徒の姿から，授業づくりの在り方について考察する。																																										
研究内容・方法 研究計画等	<p>○内容と方法</p> <ul style="list-style-type: none"> ・本研修の初めには，総合教育センターの「出前授業づくり研修」を受けて，特別支援教育における授業づくりの概要を学び，授業づくりの基本について共通理解を図る。 ・研究授業を通して授業づくりを実践するが，研修単位は話し合いが深めやすいように，学年あるいは課題別グループ4～10名ほどで行う。 ・事後検討会は，ワークショップ型で行い，児童生徒の実際の姿から分かる実感やできる喜びを味わえていたかを検討し，手立てや工夫の効果などの共有化を進める。 ・長期休業中には，研修図書や学会誌などを持ち寄って閲覧したり，教材や自作教材を展示して手に取って試したりできる「お勧めの書籍・教材展」を実施するほか，専門性や特技をもった教師が講師となって，学び合う機会「自主研修会」を開催する。 																																										
<p>研究の概要</p> <ul style="list-style-type: none"> ・研究経過 ・研究成果等 	<p>○研修の経過</p> <table border="1" data-bbox="427 1066 1423 1576"> <thead> <tr> <th>区分</th> <th>月</th> <th>研修日</th> <th>研修の内容</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td rowspan="2">児童生徒理解期間</td> <td>4</td> <td>研修日①</td> <td>(1) 新学習指導要領について ・新学習要領の特徴と本校の課題について (2) 研修の流れについて ・今年度の研修の方向性や内容について，全体で確認する。</td> </tr> <tr> <td>5</td> <td>研修日②</td> <td>(1) 出前研修(外部講師)を利用した校内研修(講師：遠藤彰先生)「新学習指導要領を踏まえた国語・算数」</td> </tr> <tr> <td rowspan="10">研修・授業づくり期間</td> <td>6</td> <td>指導主事訪問</td> <td>○研究授業 ○事後検討会</td> </tr> <tr> <td>7</td> <td>研修日③</td> <td>(1) 出前研修(外部講師)を利用した校内研修(講師：遠藤彰先生)「教科の見方・考え方を働かせるとは」</td> </tr> <tr> <td>7</td> <td>夏休み</td> <td>【夏季研修会】(開催未定)</td> </tr> <tr> <td>8</td> <td>研修日④</td> <td>・支援部とタイアップ→先生方に研修の呼びかけをする。</td> </tr> <tr> <td>9</td> <td>研修日⑤</td> <td>【研究授業】</td> </tr> <tr> <td>10</td> <td>研修日⑥</td> <td>・対象児童生徒の実態把握，目標設定→授業内容の検討→略案作成→授業→事後検討会を行う。</td> </tr> <tr> <td>11</td> <td>研修日</td> <td></td> </tr> <tr> <td>12</td> <td>研修日⑧</td> <td>・A課程，小学部，中学部：学年もしくは，学年部単位</td> </tr> <tr> <td>1</td> <td>研修日⑨</td> <td>・高等部：課題別</td> </tr> <tr> <td>2</td> <td>研修日⑩</td> <td>・略案，記録の提出</td> </tr> </tbody> </table> <p>○研修成果</p> <p>研究授業で見られた児童生徒の姿を出し合い，授業づくりの視点から振り返った。そうしたなかから，次のような成果と課題を得ることができた。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・実態に応じた教材・教具の用意ができた。 ・個々に応じた働き掛けや取り組ませ方の工夫があった。その結果，生き生きと取り組む児童の姿がたくさん見られた。 <p>○研修課題</p> <ul style="list-style-type: none"> ・児童生徒の学び合いを引き出す学習課題の設定が難しかった。 ・学級・学年を超えた児童理解が十分にできなかった。 	区分	月	研修日	研修の内容	児童生徒理解期間	4	研修日①	(1) 新学習指導要領について ・新学習要領の特徴と本校の課題について (2) 研修の流れについて ・今年度の研修の方向性や内容について，全体で確認する。	5	研修日②	(1) 出前研修(外部講師)を利用した校内研修(講師：遠藤彰先生)「新学習指導要領を踏まえた国語・算数」	研修・授業づくり期間	6	指導主事訪問	○研究授業 ○事後検討会	7	研修日③	(1) 出前研修(外部講師)を利用した校内研修(講師：遠藤彰先生)「教科の見方・考え方を働かせるとは」	7	夏休み	【夏季研修会】(開催未定)	8	研修日④	・支援部とタイアップ→先生方に研修の呼びかけをする。	9	研修日⑤	【研究授業】	10	研修日⑥	・対象児童生徒の実態把握，目標設定→授業内容の検討→略案作成→授業→事後検討会を行う。	11	研修日		12	研修日⑧	・A課程，小学部，中学部：学年もしくは，学年部単位	1	研修日⑨	・高等部：課題別	2	研修日⑩	・略案，記録の提出
区分	月	研修日	研修の内容																																								
児童生徒理解期間	4	研修日①	(1) 新学習指導要領について ・新学習要領の特徴と本校の課題について (2) 研修の流れについて ・今年度の研修の方向性や内容について，全体で確認する。																																								
	5	研修日②	(1) 出前研修(外部講師)を利用した校内研修(講師：遠藤彰先生)「新学習指導要領を踏まえた国語・算数」																																								
研修・授業づくり期間	6	指導主事訪問	○研究授業 ○事後検討会																																								
	7	研修日③	(1) 出前研修(外部講師)を利用した校内研修(講師：遠藤彰先生)「教科の見方・考え方を働かせるとは」																																								
	7	夏休み	【夏季研修会】(開催未定)																																								
	8	研修日④	・支援部とタイアップ→先生方に研修の呼びかけをする。																																								
	9	研修日⑤	【研究授業】																																								
	10	研修日⑥	・対象児童生徒の実態把握，目標設定→授業内容の検討→略案作成→授業→事後検討会を行う。																																								
	11	研修日																																									
	12	研修日⑧	・A課程，小学部，中学部：学年もしくは，学年部単位																																								
	1	研修日⑨	・高等部：課題別																																								
	2	研修日⑩	・略案，記録の提出																																								

※本様式内で簡潔にまとめてください。なお，項目名や枠の大きさは任意に変更していただいて結構です。

令和4年度 (宮城県立名取支援) 学校の研究概要 ~令和5年1月末現在~

運営委員氏名 (島津 真樹)

研究主題	知的障害のある児童生徒に応じた資質・能力の育成を目指した授業づくり〈3年次〉 ～ P D C A サイクルに基づいた学習指導計画の活用による授業実践 ～				
研究目標	新様式の学習指導計画を活用し、P D C A サイクルに基づいた授業実践を蓄積することを通して、三つの柱(評価の3観点では「知識・技能」、「思考・判断・表現」、「主体的に学習に取り組む態度」)を意識した知的障害のある児童生徒に応じた授業づくりを深めるとともに、新学習指導要領を踏まえた学習指導計画の整備を進める。				
研究計画	<table border="1"><tr><td>1年次</td><td>新学習指導要領を踏まえた学習指導計画の作成及び実践</td></tr><tr><td>2年次</td><td>三つの柱を取り入れた学習指導計画の活用による授業実践</td></tr></table>	1年次	新学習指導要領を踏まえた学習指導計画の作成及び実践	2年次	三つの柱を取り入れた学習指導計画の活用による授業実践
1年次	新学習指導要領を踏まえた学習指導計画の作成及び実践				
2年次	三つの柱を取り入れた学習指導計画の活用による授業実践				
研究内容及び方法	3年次(今年度): P D C A サイクルに基づいた学習指導計画の活用による授業実践 ・学習指導計画を確実に蓄積する方法を全学部統一して取り組み、P D C A サイクルを回すための仕組みづくりを行う。(「学習指導計画の蓄積マニュアル」の作成と活用) ・育成を目指す資質・能力の三つの柱に基づく目標設定ができるように理解を深め、学習指導計画の整備を進める。(総合教育センターの出前研修会の活用) ・全学部の学習指導計画を閲覧しやすい環境づくりを行う。(共有フォルダの活用) 学部ごとの学び合い ・学部ごとの実態に応じて協働での授業づくりを行う。 ・学校訪問指導では、学習指導計画を基に指導案を作成し、個に応じた目標や評価規準を設定した授業づくりを行う。 ・学習指導計画の作成及び実施。「扱う教科 主な内容」「学部段階」の確認をする。				
成果	学習指導要領を踏まえた学習指導計画を蓄積・活用する仕組みの整備 三年間の研究の成果として、学習指導要領を踏まえて作成した学習指導計画の「反省・評価」の項目まで打ち込み、次年度の指導へとP D C A サイクルを繋げる校内の仕組みが整備できた。				
課題	「学習指導計画」を「個別の指導計画」に生かしていくことが課題 「「学習指導計画」を「個別の指導計画」の目標設定や評価に生かすことができたか」				
研究紀要	という質問に約21%の教員が否定的な回答であったことから、「学習指導計画」を活用し、「個別の指導計画」の目標設定や評価にどのように生かしていくのかについて共通理解を図ることが今後の課題として残った。 研究紀要のスリム化(10分の1の厚みへ) 今年度発行の研究紀要「なとり」第35集から、これまで約180ページあった冊子を約18ページ程度へとスリム化を図った。パンフレットのような構成で、読み手の認知負荷を低減し、研究の概要が一目で分かる工夫を加えた。授業研究で活用した学習指導案などの資料は、これまでどおりコンパクトディスク(CD)で閲覧する形をとった。県内特別支援学校及び名取市内小中学校等に3月末に配付予定。				

令和4年度 (宮城県立金成支援) 学校の研究概要 ~令和5年1月末現在~

運営委員氏名 (平野 史代)

研究テーマ	「児童生徒の思考力の育成を目指した指導の工夫」 ～授業実践におけるICT活用方法の探究を通して～
研究目標	ICTの活用方法について整理し、様々な指導の形態でICTを用いた授業実践を行う中で児童生徒の思考力を育むためのICT活用の方法を発達段階ごとに探る。
研究内容・方法 研究計画等	<令和4年度(1年次)> ※令和4年度～6年度(3年計画) (1) 研修会の開催 ①学習指導要領におけるICTの取り扱いについて ②児童生徒の思考力の育成について ③ICTを活用した授業改善について (2) 本校で行われているICT活用の分類と提供 ①ワークショップでの情報共有 ②学部ごとの実践事例の発表会 ③ICTを活用した授業実践について実践事例集の作成 <令和5・6年度(2～3年次)> (1) 今年度の取組を生かした、ICTを活用した授業実践 (2) ICTを活用した授業実践について実践事例集の作成
研究の概要 ・研究経過 ・研究成果等	○研究経過 (各番号は研究内容・方法に対応) <6月> ・文部科学省公開動画「特別支援教育におけるICTの活用について」視聴。 (1) -① ・「思考力の育成」の視点で、児童生徒の実態把握のためワークショップを開催。 (1) -②, (2) -① <7月> ・宮城県総合教育センター「指導主事派遣事業」を活用し、遠藤指導主事に「特別支援学校における思考力の育成について」御講義いただいた。(1) -② <8月> ・本校情報教育部長による、ICTを活用した授業改善研修会の開催。 1回目：拡大提示の方法や活用例、操作方法について。アプリ紹介。(1) -③ <11月> ・知障専研究協議会講義「知的障害教育の授業づくり」の伝講会。(1) -② ・ICTを活用した授業の実践事例発表会の開催。(2) -② <12月> ・本校情報教育部長による、ICTを活用した授業改善研修会の開催。 2回目：プログラミング体験(1) -③ ○研究成果 ・教職員間で特別支援教育におけるICT活用の意義について共通理解が進み、ICTを活用した授業改善も多く見られるようになった。 ・教室での授業だけではなく、学校行事などでICTが活用される場面が増え、説明や発表などもICTを活用して行ったため、生徒が集中して活動に取り組むことができている。 ・ワークショップの開催で、実態把握だけでなく、生徒に考えさせるための手立てについても意見を交わし合えたことで、共通理解の下、意図的に「考えさせる場面」を授業に盛り込むことができた。 ・「みやぎ授業づくりガイド」の活用で、目標と評価設定の視点について理解を深めることができた。特に「思考力」の評価基準や目標設定の考え方が参考になり、取り入れるポイントや表記例を確認することで、思考力育成のイメージを持つことができた。

令和4年度 宮城県立迫支援学校 共同研究 ～令和5年1月現在～

研究主題	三つの柱に基づいた目標の到達に迫る授業作りについて（2年目） ～目標到達に向けた手立ての工夫と3観点による評価の充実を通して～																								
研究目標	三つの柱に基づいて目標を設定し、その妥当性について検討するとともに、単元題材に含まれる各教科の具体的な目標・内容についての共通理解を図り、目標到達に向けた手立ての工夫や3観点に基づいた学習評価を行うことを通して、児童生徒一人一人の目標の到達に迫る授業作りの在り方を探る。																								
研究の計画 今年度の 研究計画と内容	1) 研究期間 令和3年度～2年間 2) 今年度の研究 (1) 今年度の研究計画 <table border="1" data-bbox="411 719 1425 1899"> <thead> <tr> <th colspan="2" data-bbox="411 719 1425 757">主な取組</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td data-bbox="411 757 496 795">4月</td> <td data-bbox="504 757 1425 795">・二年次の研究の方向性、具体的な内容、計画の検討等を行う。</td> </tr> <tr> <td data-bbox="411 795 496 869">5月</td> <td data-bbox="504 795 1425 869">○研究全体会Ⅰ ・二年次の研究の方向性、内容、計画等の提案をする。</td> </tr> <tr> <td data-bbox="411 869 496 965">6月</td> <td data-bbox="504 869 1425 965">・三つの柱に基づいた目標設定や3観点による評価の指針となる参考資料についての検討をする。 ・VTR視聴による研究授業の準備を行う。</td> </tr> <tr> <td data-bbox="411 965 496 1122">7月</td> <td data-bbox="504 965 1425 1122">○VTR視聴による研究授業 ・授業の様子のVTRを視聴し、三つの柱に基づいた目標の妥当性、単元題材に含まれる各教科の具体的な目標・内容、目標の到達へに向けた手立ての工夫、3観点による評価について、ワークショップ型検討会を実施し、検討する。</td> </tr> <tr> <td data-bbox="411 1122 496 1518">8月</td> <td data-bbox="504 1122 1425 1518">○研究授業（11月）に向けた学習指導案検討会Ⅰ ・設定した三つの柱に基づいた目標の妥当性について検討する。 ・単元題材に含まれる各教科の具体的な目標・内容について検討する ・三つの柱に基づいた目標の到達へに向けた手立ての工夫について検討する。 ・3観点による評価について検討する。</td> </tr> <tr> <td data-bbox="411 1518 496 1682">9月</td> <td data-bbox="504 1518 1425 1682">○研究授業（11月）に向けた学習指導案検討会Ⅱ ・設定した三つの柱に基づいた目標の妥当性について検討する。 ・単元題材に含まれる各教科の具体的な目標・内容について検討する ・三つの柱に基づいた目標の到達へに向けた手立ての工夫について検討する。 ・3観点による評価について検討する。</td> </tr> <tr> <td data-bbox="411 1682 496 1765">10月</td> <td data-bbox="504 1682 1425 1765">・研究授業（11月）に向けた取り組み、準備等を行う。</td> </tr> <tr> <td data-bbox="411 1765 496 1832">11月</td> <td data-bbox="504 1765 1425 1832">○研究授業（学校訪問） ・研究授業（各教科等を合わせた指導） 小学部（遊びの指導） 中学部（生活単元学習） 高等部（作業学習） ・事後検討会（学部ごと、ワークショップ型の検討会を行う。）</td> </tr> <tr> <td data-bbox="411 1832 496 1899">12月 1月</td> <td data-bbox="504 1832 1425 1899">・二年次の研究の成果と課題について検討する。</td> </tr> <tr> <td data-bbox="411 1899 496 1966">2月</td> <td data-bbox="504 1899 1425 1966">○研究全体会Ⅱ ・二年次の成果と課題、研究のまとめについて発表する。</td> </tr> <tr> <td data-bbox="411 1966 496 2011">3月</td> <td data-bbox="504 1966 1425 2011">○研究全体会Ⅲ ・次年度の研究についての提案をする。</td> </tr> </tbody> </table> (2) 研究の方法と内容 ①三つの柱「知識及び技能」「思考力、判断力、表現力等」「学びに向かう力、人間性等」に基づいて目標を設定し、その妥当性について検討する。【何ができるようになるか】	主な取組		4月	・二年次の研究の方向性、具体的な内容、計画の検討等を行う。	5月	○研究全体会Ⅰ ・二年次の研究の方向性、内容、計画等の提案をする。	6月	・三つの柱に基づいた目標設定や3観点による評価の指針となる参考資料についての検討をする。 ・VTR視聴による研究授業の準備を行う。	7月	○VTR視聴による研究授業 ・授業の様子のVTRを視聴し、三つの柱に基づいた目標の妥当性、単元題材に含まれる各教科の具体的な目標・内容、目標の到達へに向けた手立ての工夫、3観点による評価について、ワークショップ型検討会を実施し、検討する。	8月	○研究授業（11月）に向けた学習指導案検討会Ⅰ ・設定した三つの柱に基づいた目標の妥当性について検討する。 ・単元題材に含まれる各教科の具体的な目標・内容について検討する ・三つの柱に基づいた目標の到達へに向けた手立ての工夫について検討する。 ・3観点による評価について検討する。	9月	○研究授業（11月）に向けた学習指導案検討会Ⅱ ・設定した三つの柱に基づいた目標の妥当性について検討する。 ・単元題材に含まれる各教科の具体的な目標・内容について検討する ・三つの柱に基づいた目標の到達へに向けた手立ての工夫について検討する。 ・3観点による評価について検討する。	10月	・研究授業（11月）に向けた取り組み、準備等を行う。	11月	○研究授業（学校訪問） ・研究授業（各教科等を合わせた指導） 小学部（遊びの指導） 中学部（生活単元学習） 高等部（作業学習） ・事後検討会（学部ごと、ワークショップ型の検討会を行う。）	12月 1月	・二年次の研究の成果と課題について検討する。	2月	○研究全体会Ⅱ ・二年次の成果と課題、研究のまとめについて発表する。	3月	○研究全体会Ⅲ ・次年度の研究についての提案をする。
主な取組																									
4月	・二年次の研究の方向性、具体的な内容、計画の検討等を行う。																								
5月	○研究全体会Ⅰ ・二年次の研究の方向性、内容、計画等の提案をする。																								
6月	・三つの柱に基づいた目標設定や3観点による評価の指針となる参考資料についての検討をする。 ・VTR視聴による研究授業の準備を行う。																								
7月	○VTR視聴による研究授業 ・授業の様子のVTRを視聴し、三つの柱に基づいた目標の妥当性、単元題材に含まれる各教科の具体的な目標・内容、目標の到達へに向けた手立ての工夫、3観点による評価について、ワークショップ型検討会を実施し、検討する。																								
8月	○研究授業（11月）に向けた学習指導案検討会Ⅰ ・設定した三つの柱に基づいた目標の妥当性について検討する。 ・単元題材に含まれる各教科の具体的な目標・内容について検討する ・三つの柱に基づいた目標の到達へに向けた手立ての工夫について検討する。 ・3観点による評価について検討する。																								
9月	○研究授業（11月）に向けた学習指導案検討会Ⅱ ・設定した三つの柱に基づいた目標の妥当性について検討する。 ・単元題材に含まれる各教科の具体的な目標・内容について検討する ・三つの柱に基づいた目標の到達へに向けた手立ての工夫について検討する。 ・3観点による評価について検討する。																								
10月	・研究授業（11月）に向けた取り組み、準備等を行う。																								
11月	○研究授業（学校訪問） ・研究授業（各教科等を合わせた指導） 小学部（遊びの指導） 中学部（生活単元学習） 高等部（作業学習） ・事後検討会（学部ごと、ワークショップ型の検討会を行う。）																								
12月 1月	・二年次の研究の成果と課題について検討する。																								
2月	○研究全体会Ⅱ ・二年次の成果と課題、研究のまとめについて発表する。																								
3月	○研究全体会Ⅲ ・次年度の研究についての提案をする。																								

	<p>○ 学習指導案検討会等において、三つの柱に基づいて設定した単元題材の目標、本時の児童生徒一人一人の目標の妥当性について検討する。</p> <p>②単元題材に含まれる各教科の具体的な目標・内容について検討する。【何を学ぶか】</p> <p>○ 年間指導計画を作成する際に「各教科の具体的な目標・内容表」を用いて、設定した単元題材に含まれる各教科の具体的な目標、内容を検討する。</p> <p>③三つの柱に基づいて設定した単元題材の目標、本時の児童生徒一人一人の目標の到達に向けた手立ての工夫について検討する。</p> <p>○ 三つの柱に基づいて設定した単元題材の目標、本時の児童生徒一人一人の目標の到達に向けた手立ての工夫について検討する。</p> <p>④「知識・技能」「思考・判断・表現」「主体的に学習に取り組む態度」の3観点による学習の評価について検討する。【何が身に付いたか】</p> <p>○ 3観点による学習評価を行い、児童生徒にどういった力が身に付いたかについて検討する。</p>
<p>研究の成果</p>	<p>1) 三つの柱に基づいた目標の到達に迫る授業作りについて</p> <p>学習指導案検討会、研究授業、事後検討会において、三つの柱に基づいた目標の妥当性についての検討、単元題材に含まれる各教科の具体的な目標・内容についての共通理解、三つの柱に基づいた目標の到達に向けた具体的な手立ての工夫の考察・実践、3観点に基づいた学習評価を行うこと、を通して、児童生徒一人一人の目標の到達に迫る授業作りに取り組むことができた。「何ができるようになるか(三つの柱に基づいた目標の設定)」「何を学ぶか(単元題材に含まれる各教科の具体的な内容の検討)」「何が身に付いたか(3観点による学習の評価)」の視点に沿って、児童生徒の実態、単元題材の目標、個別目標等について教員間で共通理解を図り、指導・支援の工夫や学習評価について検討を重ねたことは、児童生徒一人一人の身に付けてほしい力や将来の姿を意識しながら、目標に到達するためのより効果的な授業作りの充実につながったものと考えます。</p> <p>①三つの柱に基づいた目標の設定(何ができるようになるか)</p> <p>学習指導案(令和4年度版)の様式に沿って、学習指導案を作成し、学習指導案検討会において、三つの柱に基づいた単元題材や児童生徒一人一人の目標について意見を出し合い、妥当性について考察することができた。</p> <p>②単元題材に含まれる各教科の具体的な内容の検討(何を学ぶか)</p> <p>設定した各教科等を合わせた指導の単元題材に含まれる各教科の具体的な目標・内容について、「各教科の具体的な目標・内容表」を用いて、考察することができた。</p> <p>③三つの柱に基づいて設定した目標の到達に向けた手立ての工夫</p> <p>各教科等を合わせた指導において、三つの柱に基づいた目標の到達に向けた具体的な手立ての工夫を行い、実践することができた。研究授業の事後検討会においては、学部ごと、ワークショップ型の検討会を実施し、手立ての有効だった点や課題点、改善点について検討し、授業改善に活かすことができた。</p> <p>④3観点による学習の評価(何が身に付いたか)</p>

三つの柱に基づいて設定した個別の目標を達成した具体的な児童生徒の姿や、どの活動場面において、何がどのようにできれば、目標を達成した姿と言えるのかについて考察し、対象児童生徒の評価のポイントを設定することができた。

2) 授業作りのP D C Aサイクルの実施について

設定した単元題材の学習指導案の検討（計画）、学習指導案に基づいた各教科等を合わせた指導の研究授業、学習指導略案に基づいたV T R視聴による研究授業の実践（実践）、研究授業の事後検討会でのワークショップ型の検討会での成果と課題についての考察（評価、改善）、と授業作りのP D C Aサイクルを回し、授業作りや授業改善の充実ための取組を行うことができた。この取組は、三つの柱に基づいて設定した児童生徒の目標の妥当性、単元題材に含まれる各教科の具体的な目標・内容、児童生徒の目標到達に迫る手立ての工夫、学習評価の設定の詳しいポイントや具体的な規準、についてより深く検討することにつながり、有効であった。また、よりサイクルを回すために、略案とV T R視聴による研究授業を実践したことも、研究主題に迫る取組として有効であった。

令和4年度 (宮城県立角田支援) 学校の研究概要 ～令和5年1月末現在～

運営委員氏名 (大浦真奈美)

研究テーマ	児童生徒の実態に応じた食に関する指導の工夫 ～食に関する実態把握の工夫と授業実践を通して～
研究目標	食に関する指導の充実に向け、実態を適切に把握できるよう工夫し、児童生徒一人一人の実態に即した指導実践を積み重ねる。また、学部間の引き継ぎにも生かし、継続して指導することを目指す。
研究内容・方法等	<ol style="list-style-type: none">1 児童生徒一人一人の実態を的確に把握するため、食に関する実態シートを作成する。2 学級ごとに研究グループを編成し、実態シートを使い複数の教員で児童生徒の実態を把握する。3 学級の中から児童生徒を1名抽出し、食に関する指導の実践シートを作成する。4 食に関する指導の実践シートを基に情報を共有し指導実践を積み重ねる。5 必要に応じて、外部専門家（言語聴覚士等）や養護教諭、栄養教諭（栄養担当）等を活用し指導・助言を得る。6 P D C A サイクルで指導内容や指導の手立ての修正を図る。7 摂食指導研修会など研修の機会を設定する。8 引継ぎの在り方を検討する。9 食に関する指導の全体計画と各学部の食に関する指導の年間計画を整備する。
研究の概要	<ol style="list-style-type: none">1 グループ研究に関すること<ol style="list-style-type: none">(1) 「食に関する実態シート」を使い、児童生徒一人一人の実態を把握(2) 抽出対象児を決め「食に関する指導の実践シート」を作成(3) 「食に関する指導の実践シート」を基に実践(4) 指導実践の検討と改善（研究日を中心としてグループごとに実施）(5) グループのニーズに応じ、言語聴覚士や栄養担当等の研究協力・指導助言(6) 「実践事例のまとめ」の作成（16グループの実践蓄積）(7) 「実践事例のまとめ」を基に、実践事例報告会を開催（2月1日開催予定）2 研究全体に関すること<ol style="list-style-type: none">(1) 摂食指導研修会の実施（今年度は4月と7月に実施）(2) 外部専門家活用事業の活用(3) 引き継ぎの在り方の確認（「給食引継ぎカード」を小学部から高等部まで作成、「給食指導に関する確認書」の活用）(4) 食に関する指導の全体計画の整備（これまでの計画を修正）(5) 食に関する年間指導計画の整備（学部ごとに新規で作成）

運営委員氏名(瀬川 由美子)

研究テーマ	各教科等の資質・能力の育成を目指した学習評価の充実(1年次/2年計画) － 目標設定から学習評価までを見通して作成する単元シートの活用をととして －
研究目標	学習指導要領において示された各教科等の育成を目指す資質・能力を踏まえ、教員間で協働して授業実践と学習評価の充実を図る。
研究内容 方法 研究計画等	<p>1 研究の内容と方法</p> <p>(1) 授業研究(各学部)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・教員一人一人が「単元シート」を活用した授業実践に参加する。 ・教員一人一人が一単位時間の流れを記載した「授業シート」の作成に参加し、学部内の授業実践を共有する。 ・各学部において、単元シートを活用した研究授業(事前検討会、事後検討会を含む)を行う。 <p>(2) 校内研修・調査分析・環境整備(研究部)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・研究内容の理解や単元シートの活用に関する校内研修を行う。また、学部研究の取組をまとめてポスター発表を行い、全体で共有できるようにする。 ・教員対象の意識調査(事前、事後)を行い、結果を分析・考察する。 ・校務システムを活用して、授業実践の資料や計画を共有する。 ・研究通信を発行し、校内研究に関する様々な情報や各学部の取組などを共有することで、教員一人一人が校内研究に参画する雰囲気を醸成する。 ・職員用掲示板や研究資料保存用の本棚を整理・活用し、校内研究に関する情報を共有する。
研究の概要 ・研究成果等	<p>1 成果</p> <ul style="list-style-type: none"> ○単元や題材の指導に当たる全ての教員が単元シートを活用した授業実践を行うことができた。また、実践した上で感じた単元シートの効果や疑問点などを、研究授業の検討会及び研究通信やポスター発表などをととして共有することができた。 ○校務システムを活用して日々の実践を共有したり、研究通信や職員掲示板を活用して研究関連の情報を共有したりしたことで、日常的に研究テーマを意識して実践する機会が増え、研究の推進につながった。 ○多くの教員が単元シートの効果を感じており、各教科等の育成を目指す資質・能力を踏まえて実践する意識が高まったことが、意識調査などから分かった。学校の教育目標の具現化に向けて校内研究を進めることができた。 ○学部をこえて参観する機会を設けたり、放課後にビデオを視聴する時間を設定したりすることでより多くの教員で授業を共有することができた。 <p>2 課題</p> <ul style="list-style-type: none"> ●単元シートを作成することに負担を感じている教員がいることが課題である。負担を軽減する単元シートの様式や活用方法を検討したい。また、教育課程の改善や個別の指導計画の活用など、単元シートの汎用性を高める方法を検討したい。 ●各教科等の育成を目指す資質・能力について理解を深めていくことが課題である。研究授業で検討することで資質・能力について理解を深めることができた一方で、日々の実践において、資質・能力の捉え方を十分に共有できないことがあった。単元シートをより効果的に活用することで、学習指導要領で示された資質・能力についての理解を深めていきたい。

令和4年度 (気仙沼支援) 学校の研究概要 ～令和5年1月末現在～

運営委員氏名 (小野寺 由紀)

研究テーマ	「個々の目標達成に迫るための指導・支援の在り方」 ～PDC Aサイクルでの授業実践を通して～
研究目標	児童生徒一人一人の適切な実態把握と、学習指導要領を踏まえた授業づくりや授業実践、学習指導要領を踏まえた教育課程の検討や授業評価を通して、個々の目標達成に迫るためのよりよい指導・支援の在り方やよりよい授業づくりを目指す。
研究の内容と方法	1) 研究期間：3年間（本年度3年次） 2) 本年度の取組 (1) 新学習指導要領に基づいた授業づくり 新学習指導要領の目標・内容一覧を整理した「内容一覧表」を参考に設定した一人一人の個別の目標を踏まえ、学習グループごとに授業の単元計画を立てたり、1単位時間の学習過程を考えたりしながら、目標達成に向けた授業実践を行った。 (2) 「授業づくりのポイント」に基づいた授業評価の実践と授業改善 付箋紙を用いた授業評価を昨年度から継続して実践した。他学部の教員も参観及び評価を行ってよいこととし、研究研修部から「よりよい授業づくりのポイント」を示して、効果的な授業評価と改善を積み重ねられるようにした。 (3) 個々の児童生徒の学習の蓄積 個々の「内容一覧表」に、達成(○)または継続指導(△)を記入し学習状況を蓄積することで、各教科・領域の学習段階を正しく把握できるようにした。 (4) 研修会や他学部見学の実施 知障専の研究協議を視聴し、「みやぎ授業づくりガイド」の活用法を学んだ。
研究の概要 ・研究経過 ・研究成果	<研究経過> 1年次は「新学習指導要領に基づく授業実践」「ファイル回覧による授業評価」「内容一覧表の作成」「教育課程の見直し」を柱として研究を進めた。また、Vineland-IIや重度重複障害児のアセスメントチェックリストによる児童生徒の実態把握を行った。 2年次は、「新学習指導要領に基づいた授業づくり」「授業評価の在り方について改善と実践」「個々の児童生徒の学習の蓄積」を柱に進め、特に評価は、「毎時間の付箋紙記入」に変更し、改善点を次の授業に即生かすというスタイルを確立した。 3年次である本年度は、よりよい授業づくりと評価の充実、学習の確実な蓄積を研究の中心に据え、2年次の内容をより強化、充実させて研究を進めた。特に、指導と評価の一体化をより一層図るため、児童生徒の振り返りから「学び」の状況を的確に捉えながら、本校独自のPDC Aサイクルをしっかりと回し、個々の発達段階に合った授業づくりや系統性のある指導・支援の在り方を確立した。 <研究成果> 教育課程については、学部ごとに指導内容の洗い出しを行い、新しい内容を、どの教科(領域)のどの単元(題材)に組み込むのか、または、新しい単元(題材)として起こすのかを話し合い、年間の指導計画に反映させることができた。 授業づくりにおいては、内容一覧表を参考に、個別の指導計画の目標や手立てを設定したり、個々の学習の蓄積を行ったりすることを通して、全教師が学習指導要領に確実に触れ、理解する機会を多くもつことができた。また、授業評価については、付箋紙による評価と改善を積み重ねることで、1単位時間ごとの授業におけるPDC Aサイクルがしっかり回り、単元や題材を、ひいては年間計画のサイクルを回すことにつながった。このように、複数の目で学習指導要領と授業内容を繰り返し検討したり、有効な支援方法を各自の実践に取り入れたりすることで、授業力の向上を図ることができ、学部内の横のつながりや学部を越えた縦のつながりを強め、組織としての教育力を高めることにつながった。 授業実践については、各教師が「よりよい授業づくりのポイント」を意識して、実態に応じた指導過程や具体的な手立てを検討したり、個々に適した教材・教具を準備したりすることで、児童生徒は学習に必要性を感じながら課題に取り組んだり、課題解決に向けて自分なりに学習を進めたりできるようになった。

令和4年度 (宮城県立古川支援) 学校の研究概要 ~令和5年1月末現在~

運営委員氏名 (佐藤 幸三)

研究テーマ	授業改善システムの効果的運用を目指して ~年間指導計画と教科別内容表との関連と指導内容の具体化を通して~
研究目標	1 年間指導計画を活用した授業改善システムについて、効果的で継続的な授業改善システムの構築を試みる。 2 年間指導計画に表された教科別内容表を、実際の単元の中での学習活動に関連付け、工夫しながら指導する意識を高める。
研究内容・方法 研究計画等	1 実践研究 (学部研究) ・学部ごとに、年間指導計画を基にした授業実践をし、そして反省や年間指導計画の修正を行う中で、効果的な授業改善システムの在り方について検証する。 ・年間指導計画と教科別内容表の関連について確認し、主体的・対話的で深い学びの実践のためのより良い指導や支援の工夫について検討する。 2 個人研修 (個人レポート) ・年間指導計画と教科別内容表との関わりについて、各教員の理解を深める。 ・指導内容の工夫について紹介し合う方法の一つとして、個人レポートの作成を行う。期間は6月から11月までとし、11月にはテーマ別での発表会を行う。
研究の概要 ・研究経過 ・研究成果等	1 (1) 授業改善の視点や年間指導計画の活用についての確認 ①校内研究研修会 (5月) 「特別支援教育における『深い学び』の実践」 (講義・演習) 講師: 県総合教育センター 指導主事 大森奈津子先生 ・前半に深い学びについての基礎的理解に関わる部分の講義、後半に自分の担当する児童生徒が深い学びをしている姿をイメージすることから、深い学びに繋がりそうな学習内容や手立てについてグループワークで考えを広げる演習を行った。 ②年間指導計画の作成について (6月 新転入者研修) ・新転入職員が本校のカリキュラム・マネジメントや授業改善システムへの理解を深められるよう、教務部主催で研修を行った。 (2) 授業改善システムの運営 ・校内研究全体会でカリキュラム・マネジメントの理解の共有を図り、その後学部ごとに活動グループを作成し、年間指導計画の活用しながらの授業改善、年間指導計画の修正に取り組んだ。 2 (1) 個人研修 ・4~11月までに実践した授業をA4用紙2枚程度にまとめ、個人レポートを作成した。実践する授業は、各教科または、合わせた指導とし、各学部の令和4年度年間指導計画を基に、授業を担当している全ての教師が授業実践を行い、レポートを作成した。

(2) 個人レポート情報交換会

- ・11月下旬に、共通する教科や学習内容ごとに5人程度のグループを作り、実践の成果を紹介し合う機会を設定した。
- ・アンケートにより、個人レポートの作成や、情報交換会によって、新学習指導要領に対する理解が深まったかについて、確認する機会を設けた。

研究の成果

授業改善システムを効果的に活用し単元を展開、振り返り、次年度の年間指導計画を立てていくこと、また個人アンケートを通じて教科別内容表の活用について考えることなど、多くの先生方が献身的に努力したことで、成果を残すことができたことが12月の職員アンケートの結果からうかがえた。

特に単元の振り返りの話し合いがあることで授業の質を高めることが期待できると共に、その過程において教師の学び合いが展開され、資質・能力や課題解決に向けたチーム力の向上が見られ、それが本校の特色として発揮されている点においてのその成果は大きい。

研究目標について反省してみると、「1年間指導計画を活用した授業改善システムについて、効果的で継続的な授業改善システムの構築を試みる」について、研究部として授業改善システムについて基本的な流れを研究部会ごとに確認し、昨年度よりスリムな形での実施ができ、かつ各学部の運営上の工夫や課題を8月までに明確にすることができた。その成果を教務部に引き継ぎ、教務部と連携して次年度の運営について考えることができたことで目標を一定以上達成することができたと考える。

「2年間指導計画に表された教科別内容表を、実際の単元の中での学習活動に関連付け、工夫しながら指導する意識を高める」について、コード（単元における教科別内容表の内容項目）を意識して学習計画を立てることやコードを意識した指導について考えることができたと考える教師が多くいたことにより、教科別内容表のコードや段階についての理解や年間指導計画との関連性を普段から少しずつ意識できるようになった。

以下に他に成果として挙げられるものを記載する。

- ・新学習指導要領と本校の児童生徒の実態に即した年間指導計画の作成（修正）を図ることができ、本校のカリキュラム・マネジメントの運営において、教員全員で協働しているという意識が強まった。
- ・教科別内容表における学習内容（コード）が年間指導計画にできるだけ網羅されるよう、再確認しながら年間指導計画を計画することができた。
- ・深い学びの視点についての理解が深められ、授業改善の視点（方法）を意識した授業作りを自然に行うことができるようになってきた。
- ・教務部との円滑な連携が図られ、次年度の効果的な授業改善システムの在り方について方向性を導き出すことができた。

※本様式内で簡潔にまとめてください。なお、項目名や枠の大きさは任意に変更していただいて結構です。

令和4年度 支援学校小牛田高等学園 の研究概要 ～令和5年1月末現在～

運営委員氏名 (五十棲 康紘)

研究テーマ	社会的・職業的に自立する力を育成するための指導の在り方を探る ～思考力・判断力・表現力を育む授業改善を通して～
研究目標	・生徒が社会人としてよりよく生きるために、課題や困難を改善し、社会参加に関わる資質を養う力を付ける。 ・人と「かかわる」、より良い生き方を「もとめる」、社会での役割を「はたす」ことができるような力を付ける。
研究内容・方法 研究計画等	4月27日 研究全体会 5月17日 スキルアップ講座 6月17日 校内研究日(グループごとによるテーマ設定) 6月から9月 授業力向上研修(授業実践) 9月13日 校内研究日(グループごとによる授業検討会) 10月19日 スキルアップ講座 11月30日 校内研究日(グループごとによる授業改善の話し合い) 1月26日 校内研究日(グループごとによる研究成果発表) 2月 8日 スキルアップ講座 3月 9日 研究全体会
研究の概要 ・研究経過 ・研究成果等	「社会的・職業的に自立する力を育成するための指導の在り方を探る」ことを主題として、令和2年度より3年計画で研究実践を行ってきた。今年度は、より良い授業づくりを目指し、副題を「思考力・判断力・表現力を育む授業改善」として実践を行った。 実践方法としては、教科・領域を中心としたグループを設定し、望ましい授業の在り方や授業における方向性に関する意見交換を行える機会を設け、また、学習指導案(略案)を全員が作成し、一定期間内に、研究テーマを踏まえた授業実践し、相互で参観した。さらに授業実践終了後に事後検討会を設定し、参加者の多くから意見を吸い上げ、以後の授業に生かすことができるようにした。 教科・領域ごとに分けたグループを設定したことで、先生方がテーマをもとに各自の授業計画や、指導の方法、教科や領域における指導の方向性などについて活発に話し合いを行う場面が多く見られた。また、PDCAサイクルによる継続した授業改善が意識され、常に自己の授業を振り返って分析し、生徒の資質・能力の育成に向けて伸ばしていきたい力やそのために考えられる手立てを考えながら、授業を展開する姿が多く見られるようになった。

※本様式内で簡潔にまとめてください。なお、項目名や枠の大きさは任意に変更していただいて結構です。

令和4年度 (宮城県立利府支援) 学校の研究概要 ～令和5年1月末現在～

運営委員氏名 (佐藤 智恵)

研究テーマ	「児童生徒の実態に応じた資質・能力の育成を目指した指導の在り方を探る」(仮) ～主体的・対話的で深い学びの視点を踏まえた授業改善を通して～
研究目標	新学習指導要領の理念，内容について共通理解を図るとともに，児童生徒に身に付けさせたい資質，能力を明確にしなが授業改善に取り組み，児童生徒の実態に応じた資質，能力の育成を目指した指導の在り方を探る。
研究内容・方法 研究計画等	研究の内容 (1) 新学習指導要領について教員一人一人の理解を深める。 (2) 学部ごとの教育目標から児童生徒に身に付けさせたい資質，能力を明確にし，授業づくりに生かす。 (3) 個々の実態把握から，児童生徒の実態に応じた資質，能力を育成するための授業づくりを「主体的・対話的で深い学び」に視点をあて再検討していく。 研究の方法 (1年次) (1) 「新学習指導要領」，「主体的・対話的で深い学び」についての研修会 (7月～8月) 「新学習指導要領」，「主体的・対話的で深い学び」について研修会を行い，教員間で新学習指導要領において求められている子どもに身に付けさせたい資質，能力について改めて共通理解を図り，研修の内容に基づいた授業改善，授業づくりの方法を確認する。 (2) 研究授業 (指導案検討会，事後検討会含む) (9～12月) 研修会の内容を基に授業づくりを行い，学部ごとに研究授業を行う。(授業者1名) (3) 実践報告の作成 (1～3月) 研究授業，事後検討会等，今年度の取り組みを学部ごとにまとめ，成果，課題を来年度につなげられるよう実践報告としてまとめる。
研究の概要 ・研究経過 ・研究成果等	令和4年度より新学習指導要領に基づく，「主体的・対話的で深い学び」の視点から授業改善を行うことをテーマに，新学習指導要領に関する研修や小，中，高のそれぞれの学部で研究授業を行いながら4月より研究を進めてきた。新テーマとなって1年目の今年度は，新型コロナウイルス感染症の感染状況により，当初企画していた全職員での研修や授業のための事前検討会が動画視聴による個人研修になったり，実施できなかったりするなど計画通りに進めることが難しかった面もあったが，12月までの段階で各学部の実態に合わせた実施しやすい形態で(細案形式の授業を実施して全体で検討をする，略案形式で2つの授業を実施し，グループに分かれて検討をするなど)研究授業を行うことができた。 今後は行われた研究授業を基に，それぞれの学部ごと「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業内容や配慮，工夫点の振り返り，育成したい能力や資質等へのアプローチ，課題点等をまとめ3年計画となる本研究の2年目へとつなげていきたい。

※本様式内で簡潔にまとめてください。なお，項目名や枠の大きさは任意に変更していただいて結構です。

令和4年度 宮城県立支援学校岩沼高等学園の研究概要 ～令和5年1月末現在～

運営委員氏名 (浜中 真由美)

研究テーマ	生徒の情報活用能力の育成を目指した授業づくり ～生徒のICTの活用を通して(2年次)～
研究目標	生徒の情報活用能力を育成するためのICTの活用方法と授業の在り方を探る
研究内容・方法 研究計画等	(研究内容・方法) (1) 教師対象のICT活用指導力向上のための勉強会の開催 (2) 個に応じた目標設定や支援の手立てと評価 (3) 情報活用能力の育成につながる遠隔地との交流授業の実践 (4) 生徒に身に付けさせたい情報活用能力の見直し (研究計画) 4月 校内研修会 / 情報モラル研修会 5月 第1回研究全体会 / 校内研究・研修内容の決定 / ICT勉強会①② 9月 特別支援学校訪問指導 教科: 流通・サービス, 農業 10月 校内研修会/ICT研修会 11月 校内授業研究会 教科: 数学, 特別活動, 音楽 / 第2回研究全体会 2月 校内研修会 / 第2回研究全体会 3月 研究集録の作成
研究の概要 ・研究経過 ・研究成果等	(1) 情報教育部と共同で企画し, 教師対象のICT勉強会や情報モラル研修会を開催した。また, 10月には静岡大学の塩田真吾先生によるオンラインでの情報モラル研修会を実施した。 (2) 研究授業において, 本校生徒を対象とした段階別の情報活用能力チェックリストを作成した。また, 抽出生徒を対象に個別のICT活用方針を決めて支援の手立てを工夫した。 (3) 本校と川崎キャンパスにおいてオンラインでの交流学习を重ねた。2学年では校外学習の事前学習で職業能力開発校訪問時の質問内容を考えて発表し合う活動や, 事後のまとめ発表会, 修学旅行実行委員会の交流学习を実施した。 (4) 本校生徒に身につけたい情報活用能力についての教師対象アンケートをふまえ, 昨年度作成したものを見直し「ICTの活用を通して身につけたい情報活用能力一覧」を作成した。また「情報活用能力育成のためのカリキュラムマネジメント表」を整理し各教科におけるICTの活用についてまとめ実施した。 (成果と課題) ○GoogleWorkspaceやアプリについて研修で学んだことを生かし, 各教科ともにICTを活用する機会が増え, 生徒の活用スキルや学習意欲が向上した。 ●生徒の活用能力を育成するためには教師の活用指導力をより高めていく必要がある。

令和4年度 (宮城県立山元支援) 学校の研究概要 ～令和5年1月末現在～

運営委員氏名 (菅原 彩)

研究テーマ	個に応じた指導・支援の充実を目指して ー少人数グループでの学び合いと事例研究を通してー
研究目標	事例研究と少人数グループでの学び合いを通して、児童生徒一人一人の実態に応じた指導・支援の在り方や工夫・改善について探る。
研究内容・方法 研究計画等	○事例研究レポート 「一人一事例」の事例研究を行い、レポートとしてまとめる。テーマは各自が取り組みたい内容をエントリーシートに記入し、それを基に少人数グループで話し合いを経て実践テーマや方針等を設定し、取り組む。担任をしていない教員は、それぞれ担当している業務内容の課題や効率化を図る手立て等をテーマとする。 ○少人数グループでの学び合い 研究を進める単位として、学部や教育部門の垣根を越えた少人数グループを設定する。各グループにはファシリテーターとして、主幹教諭、学部主事、研究副部長と各グループで選出された教員が加わり、学び合いを促進する役割を担う。学び合いの場面では、「フリートーク」「自由奔放」「批判厳禁」「便乗歓迎」「質より量」を共通認識し、研究を進めていく。 ○教員間の情報交換と学び合い 「ヤマリク」という名称で、校内研究と関連するスキルアップ研修会も取り入れて行っている。全職員で学びたいことや身に付けたい技術などを出し合い、内容やジャンルによってグルーピングし、グループ毎に具体的な内容を決定して「学び合う」研修を進めている。今年度は、「ICT活用」「地域の人・物・事調査」「物作り」「防災料理・調理実習」「手話サークル」の5グループで実施している。 ○研究計画 4月 全校研究日①(研究全体会) 5月 実態把握研修会 8月 全校研究日②(事例研究中間報告会) 2月 全校研究日③(事例研究報告会) 3月 全校研究日④(研究全体会) ヤマリク(スキルアップ研修会) 年6回程度
研究の概要 ・研究経過 ・研究成果等	○これまでの経過 8月の中間報告会では、校舎内の8会場でそれぞれ3コマずつのポスターセッションを行った。事前にリストアップしてある発表内容から見聞きたい内容を各自が選び、少人数での学び合いを行った。その後、教員へのアンケートを実施したところ、7割の教員から「報告会は学び合いになった」という結果を得られた。 2月には、各自の1年間の事例研究のまとめとして、事例研究報告会を実施する予定である。

※本様式内で簡潔にまとめてください。なお、項目名や枠の大きさは任意に変更していただいて結構です。

令和4年度 (宮城県立小松島支援学校) 学校の研究概要 ～令和5年1月末現在～

運営委員氏名 (高橋 尚之)

研究テーマ	児童生徒一人一人を大切に生活単元学習の工夫 評価・改善シートを用いた授業の改善 ※2年目
研究目標	「各教科等を合わせた指導」の意義と各教科等の指導内容との関連について理解するとともに、的確な実態把握や目標設定、手立ての工夫を通して、個の実態に即し、適切に個の能力を引き出すよう生活単元学習の指導の充実を目指す。
研究の計画 今年度の 研究計画と内容	研究機関～3年間 研究の内容と方法 (1) 作成し直した生活単元学習の年間指導計画を踏まえた授業計画と実践を行う。 (2) 小・中・高の各学級、A課程において、生活単元学習の授業を提供し、学部ごとの実情に応じて参観、ビデオ、リモート等による研究授業を行い、「評価・改善シート」を活用しながら事後検討会を行う。 (3) 新学習指導要領に基づく生活単元学習の授業作りに関する研修会を実施する。 (4) 学部ごとの事後検討会で出た成果と課題をまとめ、全体会で発表を行い、学校全体で共通理解を図る。 令和4年度 <学部ごとの取組：教師の指導に視点を置く> ・新学習指導要領に基づく生活単元学習の授業づくりに関する研修会を実施する。 ・作成し直した生活単元学習の年間指導計画を踏まえた授業計画と実践を行う。 ・「評価・改善シート」を作成、活用しながら研究授業を行う。 ・学部ごとに研究授業、事後検討会を行い、指導上の課題や改善点を見付けていく。
これまでの 研究経過	令和3年度 <学校としての共通理解：全体での取組> ・各教科等を合わせた指導の在り方について、新学習指導要領を押さえつつ共通理解する。 ・外部講師やオンラインによる研修を行い、先進校の取組などについて研修を行い、各教科等を合わせた指導についての理解を深める。 ・本校の児童・生徒の生活上の課題や問題は何かを分析（保護者のニーズ、実態調査等）し、各学部が目指す教育（児童・生徒、各目標）に合った内容、配列になっているかを検証する。 ・学部ごとに年間単元計画、題材配当計画の見直しを行う。

※本様式内で簡潔にまとめてください。なお、項目名や枠の大きさは任意に変更していただいて結構です。

令和4年度 宮城県立支援学校女川高等学園の研究概要 ～令和5年1月末現在～

運営委員氏名 (澁谷 真樹子)

研究テーマ	「社会的・職業的に自立する力を育てる指導の在り方（1年次／2年計画） ～集団と個のつながりを意識した自立活動の実践を通して～」
研究目標	高等部のみの知的障害特別支援学校であり、産業技術科で、3年間全寮制の知的障害特別支援学校という本校の特色を生かし、集団という人の関わりの中で個を伸ばす実践を通して「社会的・職業的に自立する力」を育てる効果的な指導の在り方を探る。
研究内容・方法 研究計画	〔研究の内容〕 ① 「自立活動指導計画シート」による指導すべき課題の共通理解 ② 自立活動の目標・内容・評価への生徒本人の参加 ③ 実践の累積と情報の共有 〔研究の方法〕 ① 学年を基盤とした実践の積み重ね ア・学校での実践 自立活動の時間の指導と、自立活動の目標を意識した各教科等の指導の実践を行った。 イ・寄宿舎での実践 自立活動の目標と関連付け、学年ごとに狙いを設定し、実践を行った。 ② 研究研修会の実施 ③ 授業研究の実施 〔研究計画〕 1年次（令和4年度）～集団と個のつながりを意識した自立活動の実践を通して～ 2年次（令和5年度）～集団と個のつながりを意識した実践を通して（仮）～
研究の概要	〔学年を基盤とした実践の積み重ね〕 「社会的・職業的に自立に向けて必要な基盤となる能力」であるとされる「基礎的・汎用的能力」の「人間関係・社会形成能力」「自己理解・自己管理能力」「課題対応能力」「キャリアプランニング能力」を各学年の実態に合わせ実践した。 1学年は「自己理解・自己管理能力」に焦点をあて、自立に向けた自分の課題に気付くことを目標とした実践をした。2学年は「人間関係・社会形成能力」に焦点を当て、集団の中で、自分の課題に向き合うことを目的とした実践をした。3学年は「課題対応能力」「キャリアプランニング能力」に焦点を当て、個人の課題に対し多方面から実践した。寄宿舎でも、毎日の引き継ぎ簿を自立活動の目標の関連づけ、寄宿舎生活を通して各学年の実践をした。 〔研究研修会の実施〕 「自立活動について」という演題で研修会を実施した。生徒の実態把握のための具体的な提案について、ワークショップを交えて研修した。 〔授業研究の実施〕 研究授業の参観、授業の動画、指導案、事後の感想、生徒の変容等の情報を共有した。 研究授業① 自立活動の時間（3年生） 研究授業② 特別の教科 道徳（2学年） 研究授業③ 専門教科 福祉（2学年） 研究授業④ 自立活動の時間（1学年）

令和4年度 西多賀支援学校の研究概要 ～令和5年1月末現在～

運営委員氏名 (熊谷 江津子)

研究テーマ	一人一人の教育的ニーズに応じた支援を目指して ～個別の指導計画を生かした事例研究を通して～ (3年計画の3年次)
研究目標	児童生徒一人一人の教育的ニーズに沿った授業実践, 事例研究等の 個別の研究をとおして, 個に応じたより適切な指導の充実を目指す。
研究内容・方法 研究計画等	<p style="text-align: center;"><u>令和4年度事例研究計画</u></p> <p>・個々の教師がP D C Aサイクルの視点に基づいた授業改善シートを活用しながら事例研究に取り組み, 小グループでの意見交換を通して事例の共有と, 効果的な課題解決を図っていく。</p>
研究の概要 ・研究経過 ・研究成果等	<p>個々の事例研究のテーマを大きく分類し「五感の活用」「指導法の工夫」「教材・教具の開発と工夫」「生活力の向上」「学習意欲の向上」の小グループを編成し, 実践と話し合いを重ねた。その結果…</p> <ul style="list-style-type: none">・授業改善の視点が明確になり, P D C Aサイクルを意識した授業づくりへの認識が高まった。・個別の指導計画の目標, 手立ての妥当性についても深く考える機会となった。・他の先生方の実践, 考え方, 悩みを共有する機会として小グループでの話し合いは学ぶことが多かった。・児童生徒の教育的ニーズ, 先生方の授業力向上のニーズにマッチした研究内容だった。・今後は単元, 題材に合った授業の振り返り方を自分なりのやり方で工夫していくことで, 授業改善の意識と力を一層高め, 同時に適正な評価についても考え深めていくことが求められる。

令和4年度 (宮城教育大学附属特別支援学校) 学校の研究概要 ~令和5年1月末現在~
運営委員氏名 (菅原しのぶ, 渡部明希)

研究テーマ	「個別最適な学び」の実現を目指した授業づくり ~子供の学びをつなぐ「 ^G 「学習の個性化シート」 ^K 」活用の授業プラン~ (2年目副題)
研究の目的	「個別最適な学び」を実現するために必要となる、授業づくりの視点を明らかにするとともに、個々の児童生徒の「教育的ニーズ」に基づいた授業づくりのプロセスとその有効性の検証を行う。
研究内容 ・方法 研究計画等	1) 研究期間：令和3年度から3年間 2) 内容と方法 (本年度は2年次) 【1年次】 (R3年度) 指導の個別化 1 「授業づくりシステム」の作成と活用 2 「教師の学び合い」を生かした授業づくり 3 「個別最適な学び」を目指した授業実践 【2年次】 (R4年度) 学習の個性化 1 「学習の個性化」の視点を踏まえた授業づくり 2 「授業づくりシステム」改め, 「M-FOCUS」としての機能の充実 【3年次】 (R5年度) 学習者自身による学びの自己調整
研究の概要 ・研究経過 ・研究成果等	○研究経過 ・ 6月：公開研究会 「個別最適な学び」の実現を目指した授業づくり~授業づくりシステムの構築を目指して~について、研究成果を発表した。 ・ 9月：校内授業研究会1 「その子(対象児童生徒の設定)に合った学習方法を意識した授業づくり」を視点として、各学部1つずつ授業を提供し、授業研究を行った。 ・ 12月：校内授業研究会2 「学習集団全体を意識した授業づくり」を視点として、各学部1つずつ授業を提供し、授業研究を行った。 ○成果 ・ 日々の学習で行った指導の手立ての有効性を実践を通して検証し、有効な手立てを、一つに(GKシート)まとめていく(学びの蓄積)ことで、一人一人の児童生徒に合った手立てを教員間で共有し、「個別最適な学びの実現」を目指した授業づくりに生かすことができた。 ・ 自己評価や他者評価(教師)を工夫することで、子供自身が自己理解を深め、主体的に学習に取り組む姿(学びの自己調整)につながることを示唆された。 ○課題 ・ 一人一人に合った目標設定を考える際、生活年齢や障害程度等の実態に応じて、よりスモールステップを踏んだり細分化したりする必要がある。 ・ 子供の自己評価に対する教師からのフィードバック(他者評価)の効果的な場面設定が不十分だった。

※本様式内で簡潔にまとめてください。なお、項目名や枠の大きさは任意に変更していただいて結構です。

令和4年度 (仙台市立鶴谷特別支援) 学校の研究概要 ~令和5年1月末現在~
運営委員氏名 (主幹教諭 早坂敬也)

研究テーマ (2年計画1年目)	「自分から学ぶ児童生徒を育てる授業づくり」 —「各教科等を合わせた指導」の授業研究を通して—
研究目標	<1年次の目標> 「各教科等を合わせた指導」(日常生活の指導, 遊びの指導, 生活単元学習, 作業学習)の授業づくりの基本を確かめ, 自分から学ぶ姿の明確な設定や環境づくりの視点を基に, 授業づくりを行うことで, 自分から学ぶ児童生徒を育てる。 <2年次の目標> (案) 1年目の各ワーキンググループでの研究の成果を学部や課程内で共有し, 学部や課程ごとに選択した指導の形態において, 視点に基づいた授業づくりに取り組むことで, 自分から学ぶ児童生徒を育てる。
研究内容・方法 研究計画等	研究内容・計画 (1年次: 令和4年度) 1 「各教科等を合わせた指導」「環境づくりの視点」勉強会 2 提案授業の視聴, 検討会 3 「各教科等を合わせた指導」における, 自分から学ぶ姿を育てる授業研究 4 ワーキンググループ(WG)ごとの事前, 事後検討会 5 「自分から学ぶ工夫」の事例シート作成, 報告会 6 Google Formsを使った研究日アンケートの実施 7 研究部通信による情報発信 (2年次: 令和5年度) (案) ・新転任者研修における令和4年度研究報告, 授業づくり勉強会 ・学部で選択した「各教科等を合わせた指導」における, 自分から学ぶ姿を育てる授業づくり(授業づくり訪問含む) ・学部内WGごとの事前, 事後検討会 ・「自分から学ぶ工夫」の事例シート作成, 整理, 報告会 ・次年度研究の検討 ・Google Formsを使った研究日アンケートの実施 ・研究部通信による情報発信
研究の概要 ・研究経過 ・研究成果等	(研究成果) ・検討会等での学びを生かして一人一事例で取り組んだことによって, 教職員一人一人のスキルの向上が見られた。 ・少人数によるワーキンググループを編成し, 授業を検討することで, 意見が言いやすく, より深く学び合いができた。 ・児童生徒自分から学ぶための環境づくりや教材教具を工夫することで, 児童生徒の意欲を引き出すことができた。 ・児童生徒が自分から学ぶことを, 教職員が強く意識して研究を重ねたことで教職員が過干渉等しなくなり, 児童生徒がより自主的に考えて学習したり行動したりする場面が増えた。

※本様式内で簡潔にまとめてください。なお, 項目名や枠の大きさは任意に変更していただいて結構です。

[支援学校研究報告様式]

令和4年度 いずみ高等支援学校の研究概要 ～令和5年1月末現在～

運営委員氏名 (佐伯 敬之)

研究テーマ	本校におけるタブレット端末を中心としたICTの効果的な活用
研究目標	本校におけるタブレット端末を中心としたICTの効果的な活用を探る。
研究内容・方法 研究計画等	1年目を研修の年とし、GIGAスクール構想や新学習指導要領、先行研究を読み解くなどしてタブレット端末を活用する上での基礎知識や理解を深めていく。 2年目を実践の年とし、本校におけるタブレット端末を中心としたICTの効果的な活用を探るために実践を行い、その成果や課題等をまとめる。
研究の概要 ・研究経過 ・研究成果等	今年度は2年計画の1年目に当たる。タブレット端末を活用する上での基礎の押さえを研修会を通して行った。知識理解が深まり、基礎的なタブレット端末の扱い方を覚えた。 また、タブレット端末の活用があれば周知し、共通理解を図った。 二年目の取り組みがスムーズに始められるように、一年目の取り組みを振り返りながら来年度の進め方を確認した。

令和4年度 (支援学校仙台みらい高等学園) の研究概要 ～令和5年1月末現在～

運営委員氏名 (菅野 恵)

研究テーマ	アセスメントを活用した個別の支援 ～心理師のコンサルテーションと実践～ (2年次/3カ年)
研究目標	1) アセスメントを活用した個別の支援、環境設定ができる(2年次) 2) 個別の日課、時間通りに生活することができる(寄宿舍)
研究内容・方法 研究計画等	【内容及び方法】 1) アセスメントを活用した個別の支援、環境設定ができる(2年次) 検証方法1：研究授業及びケース検討(常勤教員) ※研究授業は録画し全教職員が確認できるようにする。 検証方法2：環境設定確認及び統計による目標達成率検証(指導員) 2) 個別の日課、時間通りに生活することができる(寄宿舍) 検証方法：新入生に対する構造化の検討と実践、検証 【計画】※常時心理師による行動観察とFB実施 4月 アセスメントの基礎(全体研修) ケース検討 5月 ケース検討 6月 寄宿舍検証 7月 ケース検討 研究授業(常勤教員全員) 8月 心理師による全体研修 9月 ケース検討 10月 寄宿舍検証 11月 ケース検討 12月 研究授業 ケース検討 1月 ケース検討 2月 まとめ ①検証結果 ②考察 ③対策 他
研究の概要 ・研究経過 ・研究成果等	・研究授業における教員及び心理師のFBを実施し、次回研究授業の際指導、助言を活かし、更なる支援力向上を目指し課題の洗い出しを実施した。 ・寄宿舍検証は初回が説明、2回目以降は教員や心理師の助言を基にし、日常の指導・支援に活用。定期的に評価、見直し、実践を繰り返した。 ・2月には上記内容を整理、検証し3年目である次年度に開校から3年間の実践内容をまとめる予定。

※本様式内で簡潔にまとめてください。なお、項目名や枠の大きさは任意に変更していただいて結構です。